

3. 鹿田遺跡南東部における中世集落の土地区画とその構造

はじめに

第9・11次調査地点（以下、本地点と記す）では、平安時代後期～江戸時代初頭の遺構群を調査した。その遺構群からは、溝に囲まれた屋敷地や耕作地などを包括する集落の状況を復元することができる。屋敷地の位置を示す井戸や柱穴群、その屋敷地を区切る溝、耕作地の存在を想定させる小溝群などに注目して、本地点が位置する鹿田遺跡南東部における中世集落の土地区画とその構造について、時間を追ってまとめることとする。同地域には第14次調査地点や第18次調査B地点などの既報告があり、それらの成果の一部も合わせて同地域の状況を再評価したい。

(1) 平安時代後期

本地点の<5層>と<6層>に対応する。<6層>は11世紀に位置づけられる集落再開期の形成土であり、それに連続するのが<5層>である。両層を合わせて本時期の状況をまとめよう（図1）。

a. 中世集落成立期の屋敷地分布

鹿田遺跡では、平安時代前期の遺構群が10世紀には西側の鹿田遺跡（県立岡山病院地点）へと移動することが判明している（岡山県古代吉備文化財センター2007）。その後、集落は11世紀に岡大鹿田キャンパスの敷地内に回帰し、井戸を有する屋敷地が複数の地点に確認される。その一つが、第14次調査地点・第18次調査B地点であり、同遺跡の南東部域に位置する。前者では<6層><5層>に対応する井戸が四基、後者では一基の井戸が報告され、さらに、南側に位置する第3次調査地点にもその可能性が広がる。このように、本遺跡の南東部に屋敷地が集中する点が本時期の特徴である（図2）。

一方、本地点は第14次調査地点の西側に接する位置にあたるが、本時期に属する確実な井戸は確認されていない。井戸と屋敷地の配置に関連性を求めるに、本地点は屋敷地外にあたると理解される。両地点間には、地形に高低差が想定されており、比較的高くて安定した微高地部に屋敷地が展開する状態が確認される。

b. 屋敷地区画の出現

屋敷地内にあたる第14次調査地点と屋敷地外とされる本地点との境界部に、第11次調査溝22（以下、S11-溝22と記す場合あり。他も同様）とS11-溝24が南北方向に走る。その位置関係から、両溝は東側に配される屋敷地の西端を区切る溝と理解される。

<6層>に対応する溝22は、同層の時期から11世紀代に機能したと判断される。同溝の軸方向はN25°Eを示しており、鹿田構内座標軸よりも南北軸が東に傾く。北端は第14次調査地点に向かうが、同調査では確認されていない。この問題は、溝の位置が両調査地点の境界線に合致してしまったためと判断される。同溝の南端はS11-溝24に吸収される。本屋敷地周辺では<6層>検出の溝は極めて乏しく、<5層>の溝を含めても本溝と軸方向が有機的関連性を有す溝は確認できない。こうした状況は、本時期における敷地の区画が西側の低地と東側の屋敷地の境を区切るに留まるものであった可能性を示している。ただし、後世の破壊の影響も否定できないため、判断を保留せざるを得ない部分は残るが、確実な区画位置を鹿田構内座標20ライン（以下鹿田構内座標は略す。）付近に求めることはできよう。

<5層>に伴うS11-溝24は、同層の形成時期や同一溝22との重複関係から12世紀前半頃に始まり、出土遺物が示す12世紀中葉～後半に埋没したと考えられる。南北軸方向はN5°Eで真北に近い数値を示す点は、鹿田座標軸とも前段階のS11-溝22の方向とも異なっており、本時期に限定される点で注目される。ただし、20ライン付近を走る溝の位置は踏襲されている。

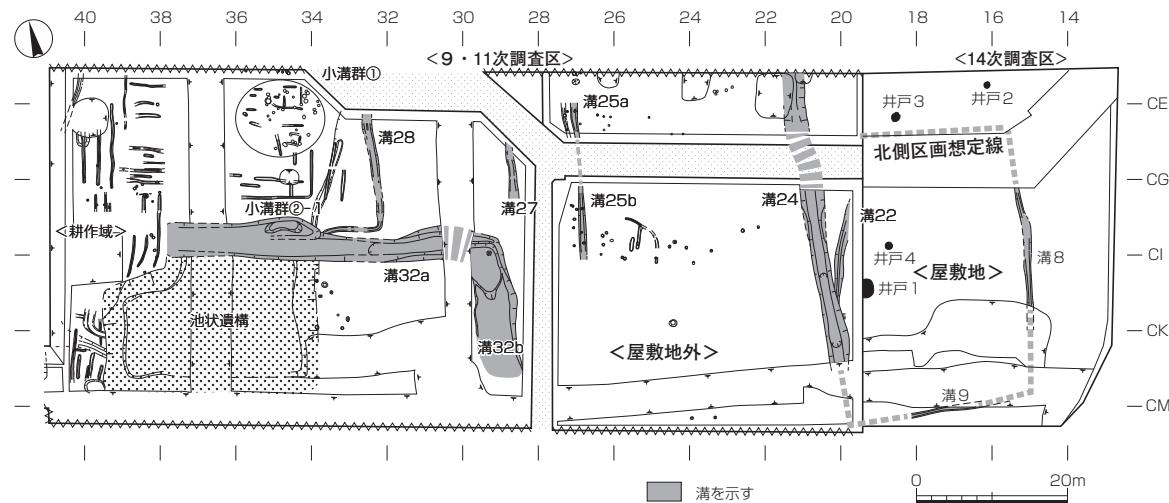


図1 平安時代後期の遺構配置（縮尺1/1000）

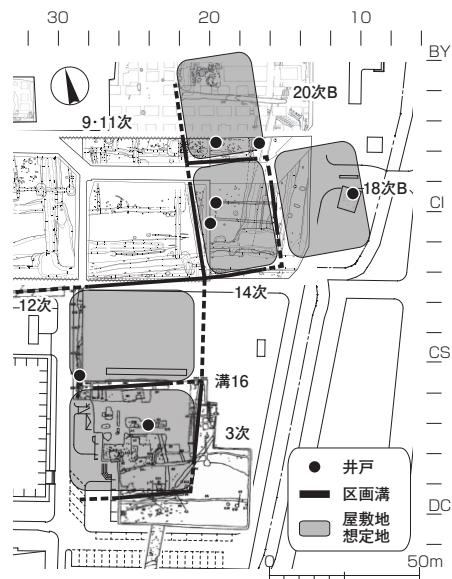


図2 鹿田遺跡南部における平安時代後期の屋敷地域（縮尺1/2500）

S 11 - 溝 24 に平行する溝は、東側の 15 ライン付近を走る S 14 - 溝 8 である（図 1）。同溝も同一方向軸を有している。両溝の間隔は中心間で 26~27m を測り、約 1 / 4 町を示す。一方、両溝に直交する東西方向の溝は、第 14 次調査区南端を走る S 14 - 溝 9 であり N 95°E 方向を示す。これら 3 条の溝はコの字状に敷地を区切り、屋敷地の東・西・南のラインを構成する。問題は北側の区画ラインである。本層では確認できないが、屋敷地の南端ライン（S 14 - 溝 9）から北へ約 36m（約 1 / 3 町）に位置する S 14 - 溝 12 が候補にあがる（図 3）。同溝は次代に対応すると報告した溝である。ただし、その中で唯一、軸方向が本時期の溝に近い。それに加えて、前述した S 11 - 溝 22 と同 - 溝 24 に認められる区画溝の位置的踏襲性を積極的に評価すると、本時期における屋敷地の北端ラインが同溝に踏襲された可能性は高いと判断される。同ラインを北側区画想定線とすると、屋敷地の区画は東西 26~27m（約 1 / 4 町）、南北 36m（約 1 / 3 町）の南北に長い形状が復元される（図 1）。

こうした屋敷地の区画溝は、本地点から周囲に向けて広がりを見せる。S 14 - 溝 9 は、本地点の南西側に位置する第 12 次調査地点の溝に、S 11 - 溝 24 は、北側の第 20 次調査 B 地点の溝に直線的に向かうことが予想される（図 2）（山本 2000・2011）。また、南側の第 3 次調査地点においては、溝 24 の位置に近い 20 ライン上に溝 16 が報告されている。同溝の軸方向は鹿田構内座標に合致しているため、同溝と直接つながる可能性は低いが、第 3 次調査地点における屋敷地の広がりを確認することができる。

S 11 - 溝 24 は幅 2.5m 前後の規模を有し、出土遺物も比較的大きな大形品を一定量含む。屋敷地を構成する他の 2 条の溝が小規模で遺物はほとんど出土しないことを勘案すると、同溝が区画溝の中心的存在であることは明らかである。こうした状況は、同溝が配されたラインの重要性を示すものであろう。

c. 屋敷地の配置（図 1・2）

区画溝を伴う屋敷地の配置を井戸の分布から確認しよう。第 14 次調査地点では、北側区画想定線を挟んで南側

に井戸1・4、北側に井戸2・3が位置する（図1）。時期は、<6層>対応の井戸1・2が11世紀後半、<5層>対応とされる井戸3・4が12世紀前半～中葉とされる⁽¹⁾。こうした井戸の配置と継続性から、南・北の両場所に屋敷地の存在が想定される。さらに、第18次調査B地点では、S14-溝8の東約25mの地点に11世紀代の井戸1が位置しており（光本2013）、第14次調査地点の東側にもう一つの屋敷地を考えることができる。南側では、第3次調査の成果から20ラインの西側に、1／3町単位で区画された屋敷地2箇所が南北に位置することが、井戸の配置からも確認されている（山本2007・2015）。このように、第14次調査地点周辺では、少なくとも南北に4列、東西に3列の屋敷地が並び、各屋敷地は1／4町～1／3町で区画されていた状況が復元される。これが鹿田遺跡南東部における土地区画と屋敷地の集中状況である。

d. 屋敷地外の状況

屋敷地外と判断される本地点では溝・池状遺構・小溝群が検出される。小溝は耕作痕と考えており、本地点内の南西域に位置する池状遺構の北～西側に耕作域の広がりを確認することができる。同群の時期の特定は難しいが、屋敷地の時期に重複すると考えて支障はないであろう。

何らかの区画に係わる溝について、S11-溝24との平行関係に注目すると、N5～10°Eの方向を示すS9・11-溝25・27・28・32bがあげられる。そのなかで溝28は同溝以西に広がる小溝群分布域の東端を画しており、耕作域の区分に係わる溝と評価される。溝24が示す屋敷地西端ラインとの間隔は約55mである。1／2町に近い数値であり、1町を二分割する区割りが、屋敷地の東西幅1／4町と合わせて注目される。溝28はCHライン付近で西側に屈曲する。同ラインは池状遺構の北端ラインに近く溝32aに踏襲される。同位置は北側の微高地が南に下降する肩部であり、溝32bも東側の微高地が西側に向けて下降する場所にあたっている。こうした地形の変換点が土地区画にあたって意識されたことは十分に考えられる。

小溝群の軸方向は鹿田座標軸に合致しており、共通するのは小溝群2-①である（図1）。同溝はS9-溝28と共に逆L字の形状を有しており、同溝を踏襲して耕作地を区切る溝と理解される。耕作地内でも小溝群の軸方向の違いからいくつかの耕作単位を示す区画を抽出することができる。また、小溝群1域では柱穴が集中しており（図1）、耕作以外に何らかの小規模な構造物があった可能性もある。

e. 集落構造の復元

本遺跡の南東部では、<6層>から<5層>段階へと、屋敷地の四方を区切る溝が整備されている。1町単位と真北軸が意識された<5層>段階の土地区画は、1／4町×1／3町幅の比較的狭い敷地内に井戸1基を有する一単位の屋敷地が東西南北に配される集落景観を生み出したと考えられる。また、屋敷地間を区切る溝の多くは幅1m未溝の小規模な傾向が指摘される。耕作域は屋敷地の間に位置しており、土地の高低差が依然として解消していない環境の中で比較的低い場所が区切られた状態を示している。

（2）平安時代末～鎌倉時代

本地点の<4b層>に対応する。同層は前段階の地面を削平して形成された層である。その時期は前段階の溝が埋没した12世紀後半に位置づけられる。この土地形成を経て、本地点は耕作地から屋敷地へと大きく変化する。そして本時期（12世紀後半～14世紀前半）において、屋敷地の区画溝は二度にわたって再編される。両時期に分けて、その遺構配置から集落構造を復元してみよう（図3）。

a. 区画溝の再編と区画の変化

溝の軸方向は、真北に近い方向から鹿田構内座標に合致する方向へと変化する。土地区画の主要ラインを構成する溝は、東西方向ではCEライン付近を走るS14-溝11からS11-溝39に続くライン（以下、ライン①とする）と、CL～CMライン間を走るS14-溝16からS11-溝49に続くライン（以下、ライン②とする）、そして南北方向では15～17ラインにあたるS14-溝10と同一溝15（以下、ライン③とする）、そして30ライン付近を走るS9-溝

46～48（以下、ライン④とする）があげられる。S14－溝12からS11－溝38は、ライン①に含まれ、S14－溝11等の前段階に位置付けられる（図3）。いずれの溝からも遺物が出土しており、埋没時期は平安時代末～鎌倉時代初頭と鎌倉時代末に大別される。

①平安時代末～鎌倉時代初頭

本時期に埋没する溝は、北側の東西ライン①にあたるS11－溝38・39とS14－溝11・12、そして南北ライン③にあたるS14－溝10である。前者のS11－溝39とS14－溝11のみは埋没後、その位置が踏襲されていない。つまり、ライン①が機能した時期は12世紀後半の本時期に限定されることとなる。それに対して、後者の溝は本時期に埋没後、S14－溝15へとそのラインは踏襲され、他のラインと同様に次代に継続する。

ライン①と③は敷地の東西・南北の各一辺を区切っているが、南側と西側の敷地区画ラインにあたる溝が確認されない点が問題となる。南北ライン③を構成するS14－溝10は、北側に向けては第20次調査B地点の溝（山本2008）へと続く方向を示す（図5）が、南端部は東西ライン②を構成する後世の溝に吸収され、同ライン以南には確認されない（図3）。また、東西ライン①を構成するS14－溝11からS11－溝39、そしてS14－溝12からS11－溝38は、いずれもS14－溝10とT字状に連結し西側に向けて走る可能性が高いが²⁾、南北ライン④以西には全く検出されない。つまり、いずれの溝もライン②およびライン④より先には延びていない。屋敷地を区画するラインの西端あるいは南端が収束し、それに直交する溝が存在しないとは考えにくい。ライン③では、溝10の埋没に続いて鎌倉時代末に埋没するS14－溝15が同溝上部に一部重複した状態で構築されていることも勘案すると、同じく鎌倉時代末に埋没するライン②④の下部に本時期に対応する溝を想定することは可能であろう。

ここで想定したライン間の距離は、南北幅がライン①と②の間で36～37m（約1／3町）、東西幅はライン③と④の間で63～68mを測る。これらにより区画される敷地は東西に長い状態が復元される。また、ライン②を構成する溝は本地点に留まらず東西に延びており、またライン③・④を構成する溝についても、それぞれ北側の調査地点へ続くことが確認される。一方、ライン②の南側は、前代に屋敷地が配される範囲であったが、本時期の区画溝を確認することはできない。つまり、<4 b層>形成期においてライン②以南から区画溝は姿を消し、本時期以降、ライン②は鹿田遺跡における屋敷地配置の南端を区切る重要なラインを構成することとなる。

なお、S9－溝45は位置的に敷地の区画ラインに対応する可能性も残るが、断面形は不安定で本時期の主要な溝とはやや異なる特徴を示すことから、現状では主要なラインとは区別しておく。S11－溝43については地形の凹み部分の影響が排除できないため区画溝とは考えにくい。

【その他の溝】

ライン③の東側に位置するS14－溝13・14は同－溝10と同一方向を示すことから、同溝と関連する可能性が指摘されている（岩崎2014）。溝の中心間距離は、溝10と溝13で約6m、溝13と溝14では2.5mである。本時期の井戸は同溝10以東で明確でない点も勘案すると、屋敷地外の溝で道の側溝的機能も考えられる。

②鎌倉時代

前代から位置が踏襲されるのはライン②～④である。その内、南北ライン③と④を構成するS14－溝15とS9－溝48は鎌倉時代末に埋没し、両ラインは消失する。一方、東西ライン②は、同ラインを構成するS11－溝49が同時期に埋没するが、S11－溝59cに位置が踏襲されて次代へと継続する。また、S14－溝16は、その位置を保つ。こうした溝が機能していた時期は、前代の溝の埋没期以後と捉えられることから、概ね12世紀後葉～14世紀前半、鎌倉時代にあたる。

区画ラインを構成する溝の接続関係などを整理すると、前代との共通性に加えて相違点も抽出される。北側の第20次調査B地点から延びるS14－溝15（南北ライン③）とS9－溝46～48（同④）はS14－溝16とS11－溝49（東西ライン②）にそれぞれ取り付く可能性が高いが、前代と同様にライン②以南へは延びていない。この南北ライン③と④の間隔は東西ライン②との結合部で64m、そして北側のCDラインでは70mへと広がる。こうした溝

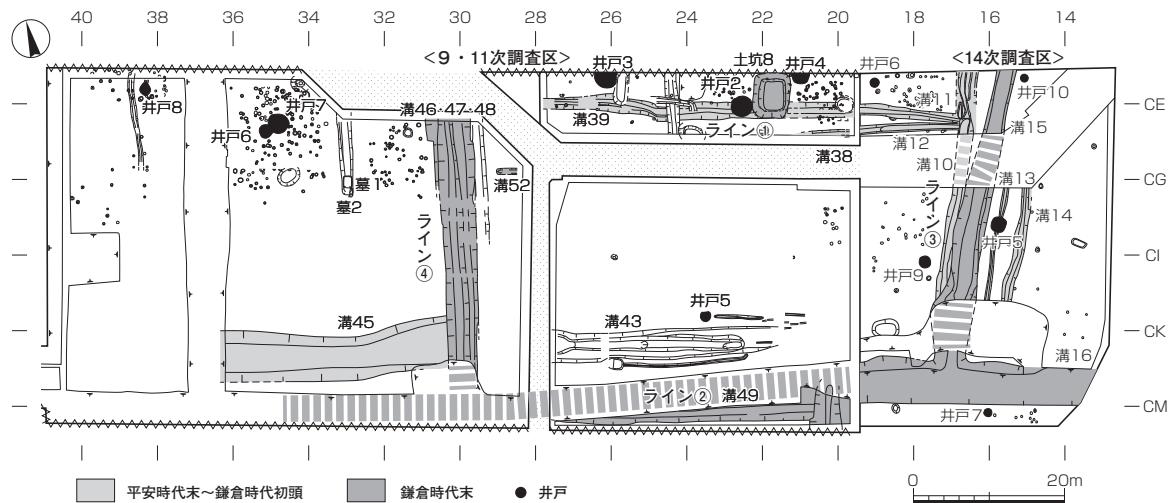


図3 平安時代末～鎌倉時代の遺構配置（縮尺1/1000）

の位置関係や敷地の東西幅は前代と共通している。一方、区画溝の規模や区画の南北幅には変化が認められる。前代のライン①を構成したS11-溝39の幅は最大2.5mで深さは0.6m程度であるのに対して、本時期のライン構成溝は幅3~5m・深さ0.8~1.3mを測り、規模の拡大が顕著である。また、敷地区画についてもライン①の消失によって南北幅が大きく拡大している可能性が高い。

本時期の土地区画について参考となるのが、第6次・7次調査地点の成果である(図5)。同地点で報告された東西方向のS7-溝20~22(BUライン)と本地点の東西ライン②を構成するS14-溝16・S11-溝49(CL-CMライン)との間隔は90~100m、南北方向のS6-溝14(70ライン付近)と本地点南北ライン③であるS14-溝15(16~17ライン)との間隔は北端部で約280mを測る。また、第6次・7次調査地点の屋敷地の東側と西側を区切る南北溝S6-溝14とS7-溝20~22の間隔は約70m(約2/3町)である。こうした数値と本地点の成果から幅約70m程度の東西区画が想定される。第6次調査地点は鹿田遺跡の中央西端に、そして本地点はその東端付近に位置していることから、本遺跡の東西約280mの敷地が約70m幅で区切られ、4区画が形成されていたと理解される(図5)。その結果、南北幅約100m弱という1町に近い規模で、東西70m前後の区画をもつ敷地が東西に並ぶ状態が復元される。

b. 敷地内の井戸の配置と屋敷地

①平安時代末(図3)

ライン①～④に区切られた敷地内の様子を井戸の配置から確認してみよう。ライン①にあたるS11-溝38・39が機能していた本時期に伴う井戸はS11-井戸3・8である。井戸の分布は、本地点の中央部を南北に区切るライン④以東では東西ライン①の北側、そして同ライン以西ではCGライン以北に限定される。溝と井戸の関係は、出土遺物や遺構の重複からS11-溝38の時期に対応するのがS11-井戸8、同溝39にはS11-井戸3が対応すると考えられる。ライン③と同④に挟まれた空間とライン④以西の空間にそれぞれ井戸一基と多数の柱穴が分布する状態となり、両場所に屋敷地の存在が復元される。地形が北に向かって高まる場所に対応する。一方、ライン③以東では明確な井戸は確認されない。S14-溝13・14の評価を勘案すると、同範囲は集落外の可能性も求められる。ライン①あるいはCGライン以南については、柱穴は極めて少ないなかで、時期は不明であるがS14-井戸9とS9-井戸5が同区画内に含まれるという状態を呈している。遺構の残存状態の問題や不確定要素の多さを考えると、同敷地の利用形態についてはその評価を保留しておきたい。

こうした屋敷地の新たな配置は、前代の第14次調査地点～第3次調査地点に広がる屋敷地分布から大きく変化

した状態を示している。特にライン②以南における屋敷地域の消失は象徴的である。本時期の土地形成が、本遺跡における耕作地と屋敷地の再編という大規模なものであったことが改めて確認されよう。

③鎌倉時代（図3）

溝以外の主要な遺構は井戸と墓そして祭祀土坑（S 11 - 土坑8）があげられる。本時期に機能した区画ラインは②～④であり、鎌倉時代末に埋没する溝の配置に対応する。

出土遺物および遺構の重複関係から井戸の推移を考えると、ライン③と④の間ではS 11 - 井戸4から同井戸2へ、そしてライン④以西ではS 9 - 井戸6から同井戸7へと続く。実年代では、13世紀前葉～中葉と考えられることから約25～30年程度の間隔となろう。前者は前代のS 11 - 井戸3と、そして後者は前代の同井戸8と、同一の屋敷地内に位置しており、その継続性が強く示される。S 11 - 土坑8は前者の屋敷地に、そして墓二基は後者の屋敷地に含まれる。ライン①は消失しているが、こうした調査地点北側への遺構の偏在的配置は前代から変化していない。南北幅の拡大を進めた土地区画であるが、本地点の範囲内では際立つ変化は認めがたい。

④時期不明の井戸

以上の評価の中で注意が必要なのが時期不明の井戸の存在である。S 11 - 井戸5とS 14 - 井戸5～7・9・10の6基があげられる。S 14 - 井戸6はその位置がS 11 - 井戸2～4と同じ屋敷地内に含まれるため、屋敷地配置の理解を変えるものではない。他の井戸については、ライン②や③の溝を挟んで20～30m間隔で点在しており、屋敷地の配置も考えさせるが、いずれも出土遺物が僅少であり、周辺の遺構が極めて希薄である点は屋敷地配置にやや疑問が生じる。S 11 - 井戸5の周囲には耕作痕と思われる小溝も検出されるなど、前述した屋敷地の井戸とは異なる様相が指摘される。こうした状況に対する解釈としては、本時期の最終段階に属する井戸として、屋敷地の西への拡大を示すという理解も可能であるが、屋敷地の井戸とは異なる機能も視野にいれ、その判断は今後の課題としておきたい。

（山本悦世）

（3）室町時代

<4 a層>に対応する。同層の形成時期は14世紀中頃である。

a. 大区画の出現（図4）

本時期の区画ラインは前代の南北ライン③④が消失して、それぞれ東へ10m、西へ36m移動した位置に新たに形成されたライン⑤（S 14 - 溝17）、ライン⑥（S 9 - 溝59a）と、前代から踏襲されたライン②で構成される。

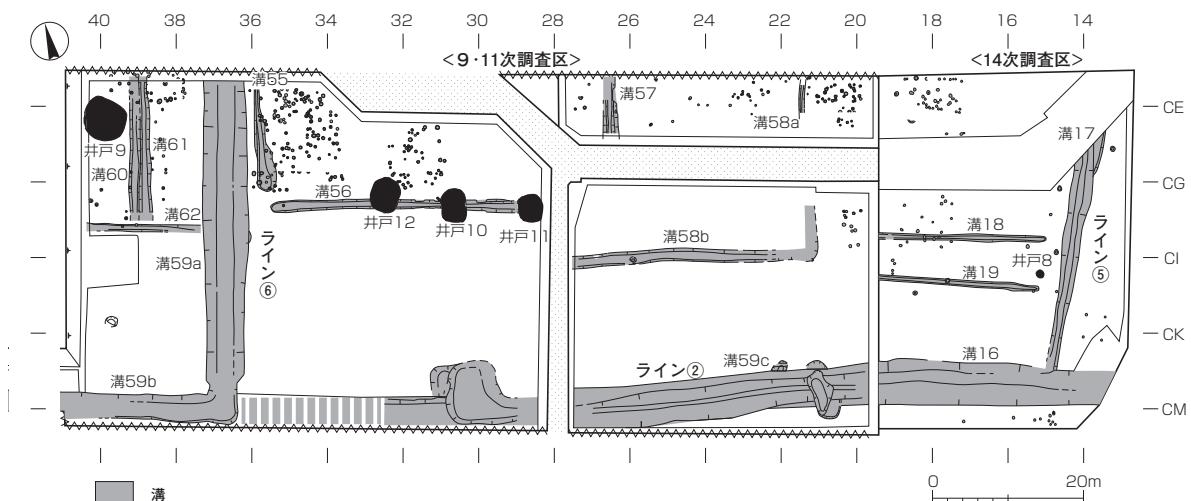


図4 室町時代の遺構配置（縮尺1/1000）

東西ライン②はS11-溝49が埋没し、その上部にS11-溝59cとして位置が踏襲される。またS14-溝16は同ライン②にその位置を保つ。ライン⑤のS14-溝17はライン②よりも南に伸びないことが確実である⁽³⁾。ライン⑥のS9-溝59aも、ライン②の溝59b・cにT字状にとりつき、これより以南へは伸びないと想定される。ライン⑤と同⑥の間はライン②との接続部で溝の中心間109m（1町）を測り、前代のライン③④間（約70m）から拡大する。

北端の区画ラインについては、前項でライン②の北90~100m付近に東西方向のラインが想定されている。このラインを構成するS7-溝20~22は、本時期には同溝上に位置する溝23に踏襲されており、本時期に同ラインが継続されていたと想定される。その結果、東西が一町、南北が約100mという、ほぼ一町四方の大区画が出現していた可能性が高い（図5）。こうした大区画を区切る溝は、幅5m程度、深さ1.5mといった大規模な形状である。

ライン②にあたる溝59b・cは、この大区画の東・西側にも伸びている。ライン⑥の西100m付近では南北方向に方向を変えたS7-溝23が位置する⁽⁴⁾。さらに西側約100mの位置は、鹿田遺跡の西端にあたり、鹿田遺跡の中に一町四方に近い大区画が東西に3区画並ぶ状況が復元される（図5）。

b. 大区画内の細分と構造（図4）

ライン⑤と⑥の間、及びライン⑥以西の大区画内には、東西方向（S9-溝56、S11-溝58b・62、S14-溝18・19）と、南北方向（S9-溝55、S11-溝57・58a・60・61）の溝が認められ、大区画内を細分する（図4）。溝はいずれも幅1~2m、深さ0.3~0.5mの小規模なものである。埋没時期は14世紀後半、15世紀後半の二時期が認められ、この二時期に何らかの変更が窺える。

こうした溝により区切られた敷地には屋敷の存在が考えられる。ライン⑤と⑥の間では14世紀後半の井戸は現在のところ見つかっていないが、S9-溝55・56により西端と南端を区切ったL字状の区画が認められる。内部には時期ははっきりしないものの柱穴群があり、ここに屋敷地を想定することができよう。区画の東端に同時期の溝は認められないが、26ラインに位置するS11-溝57が区切りとなる可能性が考えられる。同溝は南端が失われ、直接他の溝との接続関係はわからないが、溝の継続性を積極的に考えると、この敷地は東西幅50mほどに復元される。

15世紀後半の溝はS11-溝57・58・60~62、S14-溝18・19である。ライン⑤と⑥の間では、21ラインとCIラインに位置する鉤手状の溝58により東端と南端が区切られた敷地が認められ、その東西幅は溝59aと溝58の中心間で76~77mである。前代の区画から東と南に拡大していることが窺える。この中には井戸三基が連続して作られ

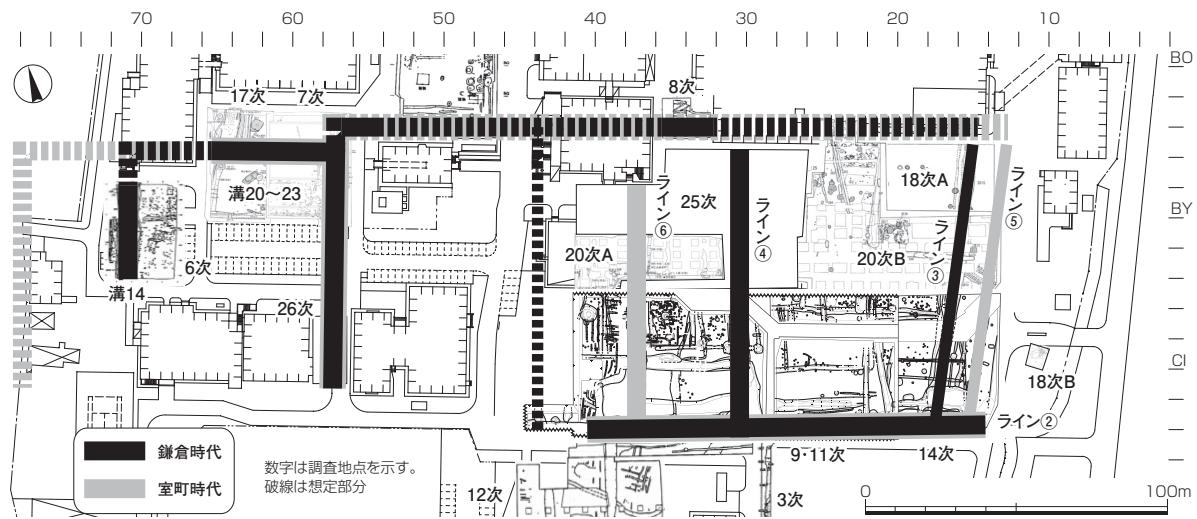


図5 鹿田遺跡南東部における鎌倉～室町時代の区画溝配置概念図（縮尺1/2500）

考察

ており、長期にわたって屋敷地として利用されたのであろう。また、ライン⑥の西隣の区画では溝60・61と溝62に東端と南端を区切られる敷地に井戸一基があり、ここにも屋敷地の存在が窺える。そのほかに21ラインからライン⑤の間に位置するS14-井戸8の形状・規模は、前述の井戸とは異なっており、屋敷地の性格が異なる可能性がある。

また大区画内ではこうした屋敷地以外の空間も確認される。14世紀代にはS9-溝55と、ライン⑥をなすS9-溝59aとの間には幅1mの空間がある。15世紀代には、S11-溝61とライン⑥をなす溝59aとの間に幅5mの空間が認められる。またS14-溝18・19はその形状から道の側溝の可能性が考えられ、その間隔は幅5mである。このように1mあるいは5mと規模の大小はあるが、こうした空間には通路やその他の機能が考えられる。

このように大区画内には、屋敷地とそれ以外の空間（通路等）の存在が窺える。またライン⑤と⑥の間では、14世紀後半には東西幅50mと想定される敷地が、15世紀には東と南に拡大して東西幅約76mになり、規模が均一なものではなく、大小の差異ができている。

こうした屋敷地は、15世紀末～16世紀初めまでに、井戸や溝が埋まり、その痕跡は姿を消す。その後、17世紀には本地点は耕作地として利用される。

（岩崎志保）

おわりに

平安時代後期の土地形成を経て鹿田遺跡に形成された中世集落が、その後、平安時代末（12世中葉～後半）と鎌倉時代末（14世紀前半）の二時期に、屋敷地の再編を伴う大規模な土地改変によって土地区画や集落構造を変えていく状況を前述した。改めてまとめると、平安時代後期には、小規模な溝によって東西1／4町・南北1／3町程度に区切られた屋敷地区画⁽⁵⁾が配置され、その区画間に耕作域が含まれる。その後、平安時代末の土地改変では、集落南東部における従来の屋敷地の配置は一新される。近代に至る東西ラインが設定され、それ以南の屋敷地は姿を消す。敷地の区画は東西2／3町・南北1／3町の時期を経て、南北はほぼ1町へと拡大する。その結果、大規模な溝によって画された東西2／3町・南北約1町程度の土地区画が、鹿田遺跡の敷地内において東西に4区画が並ぶこととなる。さらに、鎌倉時代末の土地改変を経て、室町時代には東西・南北がほぼ1町四方の大区画に至り、敷地は東西3区画へと再編される。この段階には、大区画内部の構造は、大小の屋敷地や通路そしてその他の機能を取り込む構造へと姿を変える。以上が、鹿田遺跡南東部における集落の土地区画やその構造の推移である。

鎌倉時代末に実施された土地改変は岡山平野広域に行われた可能性は既に指摘している（山本2015）が、その際に、本地点のライン②がそのまま踏襲されている点は注目される。つまり、広域を対象とした土地改変においても同ラインが何らかの基準を成した可能性が考えられ、当地域内での本集落の影響力を窺わせる。

以上、本地点では単一の屋敷地から複数の屋敷地を取り込む広がりへ、そしてさらに、屋敷地や通路など多様な機能をもつ空間を取り囲む大区画へと変化していく様相を復元することができる。また、東西方向を強く意識した大区画の配置は、広域流通物資の増加が指摘される鎌倉時代に進行しており、同時期における人や物資の動線の存在を含め、社会的変化をそこに見ることができる。

ここでは、鹿田遺跡の南東部という限定された資料の検討に留まっている。こうした状況がどこまで広がりを見せるのか、溝の軸方向が一時的に真北を示す要因、あるいは大規模な土地改変の契機など、多くの課題が山積している。今後、関連資料との比較検討から、岡山平野における中世社会の動向の中で本遺跡の性格を位置づけていきたい。

（山本悦世）

註

(1) 第14次調査報告書では、井戸3・4について<6層>検出遺構として報告した。今回、土層の時期を検討した結果、井戸3・4は<5層>

に対応するものと修正する。

- (2) 第14次調査報告書では、溝10と11・12を別遺構として報告したが、本地点において、溝39出土遺物や他遺構との切り合いを検討し、溝11・12の時期を遡らせることとした。その結果、溝10と11、溝10と12とが同時期の可能性が高くなり、これらが接続するものと修正する。
- (3) 第14次調査報告書では、溝17の埋没時期を出土遺物から15世紀後半とし、またライン②で溝17と接続する東西溝については擾乱のため確認できていなかった。本地点において、ライン②の溝59cの状況が判明し、時期を検討した結果、溝59cと溝17とが一連の溝として機能したものと考えたい。
- (4) 現在の鹿田遺跡の西端は、明治期の行政区画では岡町と東古松との境界にあたる。その位置は、S 7 - 溝23の西約100mであり、ここに大区画の南北ラインが想定される。
- (5) 平安時代の土地区画については、南北1／3町程度の区分については既に指摘している（山本2007・2015）。

参考文献

- 岡山県古代吉備文化財センター 2007『鹿田遺跡』岡山県発掘調査報告207
- 山本悦世 2007「中世の集落構造と推移」『鹿田遺跡5』岡山大学構内遺跡発掘調査報告書第23冊
- 山本悦世 2015「鹿田遺跡の土地区画と岡山平野の条里関連遺構」『条里制・古代都市研究』30 条里制・古代都市研究会
鹿田遺跡に関する文献
- 第3次調査：山本悦世他編 1990『鹿田遺跡II』岡山大学構内遺跡発掘調査報告書第4冊
- 第6次調査：松木武彦・山本悦世編 1997『鹿田遺跡4』岡山大学構内遺跡発掘調査報告書第11冊
- 第7次調査：山本悦世編 2007『鹿田遺跡5』岡山大学構内遺跡発掘調査報告書第23冊
- 第12次調査：山本悦世 2000「鹿田遺跡第12次調査」『岡山大学構内遺跡調査研究年報18』
- 第14次調査：岩崎志保編 2014『鹿田遺跡8』岡山大学構内遺跡発掘調査報告書第29冊
- 第18次調査：光本順他編 2013『鹿田遺跡7』岡山大学構内遺跡発掘調査報告書第28冊
- ：山本悦世 2008「鹿田遺跡第18次調査」『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2007』
- 第20次調査：山本悦世 2011「鹿田遺跡第20次調査」『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2009』
- 第25次調査：岩崎志保 2015「鹿田遺跡第25次調査」『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2014』